

ラルフ・エリスンの『ジュンティーンズ』  
— リンカーンへのエレジー —

竹内 美佳子

長く待ち望まれた Ralph Ellison の第二長編小説は、*Juneteenth* (1999) として死後出版された。マサチューセッツ州バークシャーズに居を据えて執筆した 360 枚余りの原稿が、1967 年の火災で焼失する非運に遭い、再び稿を起こして細部を復元する労苦は計り知れぬものがあったとされる。自宅を全焼させた不審火は、奴隷制廃止運動を生んだニューイングランドへの思いを、悲しみと拒絶感に一変させる出来事だった。廃墟を建て直して再び執筆の拠点とするのは、6 年後のことである。折しもエリソンは、時代を席卷するブラック・ナショナリズムの誹謗中傷にも曝されていた。60 年代アメリカ社会の破壊的動乱の象徴と自身に映じたこの災難を、エリソンは「天与の試練」と受け止めたかのごとく創作を続けた (Rampersad 436–442; 490)。

原稿焼失の物理的・精神的痛手に加えて執筆を難渋させた要因は、時代が作品のテーマと深く絡み合いながら、激動し続けたことにある。1954 年、公教育での人種分離を違憲とする最高裁の「ブラウン対教育委員会判決」をラジオ速報で知ったエリソンは、「目の前に開けた道が、書こうとしている本と分かち難く入り組んでいるの見通し、歓喜と懐疑に心乱れた」と、その複雑な感銘を手紙に綴っている。予測不能の混沌の時代に書く行為自体の困難を、エリソンは体感していた (Rampersad 298; Murray

157)。

1950年代半ばの着手以来、60年から77年にかけて主要部分の抜粋を文芸誌に発表しながら、エリソンは公民権運動のうねりと併走するように執筆を続けた。<sup>(1)</sup> この間、56年にはエメット・ティル殺害事件とモンゴメリーのバス・ボイコット運動、57年にはリトルロック高校事件が起こり、60年代にはランチカウンター座り込み運動やフリーダム・ライダーズ運動、ミシシッピ大学のメレディス事件を始めとする激動の歴史が続いたことは、周知のとおりである。わけても、ケネディー大統領に始まる指導者たちの暗殺はエリソンを震撼させ、暗殺未遂事件を軸に展開する自身の作品が特定の歴史的な事件を暗示せぬよう、たび重なる改稿を要することになった (Rampersad 413)。虚構と現実のせめぎ合いの中で構想を重ね、作家の死をもって封印されることになった遺作の全容は、依然謎に包まれている。本稿では、執筆開始と同時期に著されたエッセイと、小説の要をなす主人公 Hickman 牧師の説教 (Juneteenth sermon) に焦点を当て、エリソンの創造意図を探る。

## 1. 20世紀の父

物語は以下のように展開する。トロンボーン吹きギャングラーとして鳴らす Alonzo Hickman は、白人女性によってレイプ犯に仕立てられた弟を、リンチ集団の暴行で失うという悲劇に見舞われる。女はその数ヶ月後に身重の姿で突然現れ、ヒックマンは激しい怒りを乗り越えて、産婆の役を引き受ける。女は理不尽にも、恋人との関係を守るために赤ん坊を置き去りにし、ヒックマンは、父親も人種も知れぬ白い赤子を “Bliss” と名づけ、これを育む決意とともに説教師の道を歩み出す。しかしブリスは、ジュンティーンズの礼拝で母を名乗る女に連れ去られかけたことが転機となり、ヒックマンのもとから姿を消して白人として生き始める。やがて

Adam Sunraider の名でニューイングランド選出の上院議員として国政入りし、人種差別発言で悪名を馳せる政治家がブリスであることを、老牧師となったヒックマンは知る。サンレイダー暗殺計画を察知してワシントンに急行するも、ヒックマンは面会が叶わず、サンレイダーが演説中に黒人青年の銃弾に倒れるのを、上院議場の傍聴席から目撃することになる。作品の主要部分は、搬送先の病院で再会を果たす瀕死のサンレイダーとヒックマンが、対話と想念とに浮かび上がらせる記憶のフラッシュバックとして、重層的に語られる。

作品の現在時設定を 1955 年前後とエリスン自身が述べることから、**「ブラウン対教育委員会」**判決に始まる社会変動が、創作の起点となるのは明らかである。<sup>(2)</sup> エリスンが第二長編の執筆を本格的に開始した 56 年は、ブラウン判決に対する抵抗運動が、南部一帯に広がった年に当たる。判決の年にミシシッピで組織された**「市民会議」(Citizens' Council)**は、会員 30 万人を擁する強力な圧力団体として深南部に勢力を拡大し、法に対するその敵対姿勢はクー・クラックス・クランの復活を誘発した。こうした中で同年、南部選出の連邦議員 101 名が**「南部宣言」(Southern Manifesto)**なるものを発表した。人種統合に対する**「大規模抵抗」(マツシヴ・レジスタンス)**を駆動する、南部ドクトリンの明文化である。<sup>(3)</sup>

C. Vann Woodward の指摘するとおり、南北戦争直後の南部再建が、連邦軍の占領統治と黒人参政権の保証を基盤としたのに対し、20 世紀のいわゆる**「第二次南部再建」**は、連邦議会内に南部諸州の代議員が組織力をもち、法の執行を阻むべく発言力を行使した点が大きく異なる(Woodward, *Strange Career* 165)。**「南部宣言」**は、ブラウン判決を司法権の乱用と糾弾し、「あらゆる法的手段」によって人種統合命令の強行を阻止すると声明した。事実、その後 10 年間に旧南部連合諸州は、人種分離を定める 450 にのぼる法律を可決施行する。人種統合した学校の予算削減や教員免

許の交付拒否、NAACP 会員の公的機関における雇用禁止など、あからさまな政治手段によって、最高裁判決の空洞化を図ったのである（Grantham 210; Patterson 398）。南部的伝統が連邦の介入によって変化することを予感した南部白人権力は、白人一般大衆を巻き込みながらこうしてセクト主義へと駆り立てられてゆく。体制順応主義を強化するために南部一帯で言論検閲が敷かれ、理性や寛容の精神は消滅に向かった（Woodward, *Burden* 241）。「体制順応主義的熱狂の全ては、一体どこから来るのか」（*IM* 577）とエリスンが第一長編 *Invisible Man*（1952）に書いたアメリカ社会の病が、政治的ヒステリアとなって噴出した形である。

こうした状況下にエリスンは、「南部宣言」について幼なじみの Virgil Brannam に意見を求められ、滞在先のローマから手紙を書き送る。9年後にはこれを作品化し、*The Nation* 誌百周年記念号（1965年9月20日付）に発表した。“Tell It Like It Is, Baby”と題するこのエッセイは、第二長編の創造意図を窺い知る上でも、極めて示唆に富む。エリスンはこの中で、自伝と幻想を巧みに融合しながら、反動勢力に対する批判を悪夢仕立ての寓話として表出した。エッセイは、3歳にして父を亡くした喪失感をリンカーンへの思いに重ね、奴隷解放以後の米国史をシュールリアスティックな手法で告発する。

夢の中で、父ともリンカーンとも思える不思議な人に、フォード劇場をも想起させるバルコニーから鋭く凝視されるエリスンは、気がつけば、ガス燈揺らめく19世紀ワシントンの喧騒の中にいる。シートにくるまれたリンカーンの亡骸が馬車道のごみ溜めに遺棄されるのを目撃するエリスンは、暗殺者の冒瀆的奇声が残響する剣呑な空気の中で、声にならない叫びを上げる。建国の父を侮辱した「老いぼれアライグマ」とリンカーンと呼ばわる暴徒の大合唱で、葬列はカーニバルと化す。ここで言うアライグマ（coon）とは、黒人に対する蔑称にほかならない。大統領を身ぐるみ剥が

して嘲弄する暴徒は、腐肉を貪るアメリカ南部産クロコンドルのイメージに重なり、奴隷解放後90年の歴史が、リンカーンに対する暴力行為と一体になる。作家エリソンは、「読み書きのできる幼い奴隷」となって、その一部始終を目撃するのである。

かくして、父を亡くした幼年時代の喪失感、*「20世紀の父」*たるリンカーンに対する哀惜の念と分ち難く融合し、大統領の育てた果実を一世に亘り野晒しにした国家的非道が、憤りとともに浮かび上がる。エリソンは、「南部宣言」に象徴される国難を、異郷ローマにあって語り尽くせぬ無力感を吐露しつつ、上院議員の暗殺を中心事件とする小説を執筆中であると明かして、エッセイを結ぶ。

ここに予告された第二長編が、南部再建の挫折に始まる反動的歴史への批判を意図するのは明白である。『*ジュンティーンズ*』の根底をなすのは、リンカーンの死を認めまいとする、この同じ意志である。サンレイダー上院議員の暗殺計画を知ったヒックマンが、44人の黒人会衆を率いて、アラバマからワシントンD.C.へ駆けつける場面から、小説は始まる。秘書や警護に門前払いされたヒックマンは、その夜リンカーン・メモリアルを初めて訪れ、大統領の彫像にまみえる。月明かりの中でヒックマンを捕らえるのは、仄暗い陰の奥から「無限の彼方にある永遠の夜明け」を見つめる、リンカーンの眼差しである(280)。視線の向かう先を振り仰ぎたい衝動に駆られながらヒックマンは、その目に射抜かれて身じろぎもできなくなる。

He stared upward, seeking their secret, their mysterious life, in the stone; aware of the stone and yet feeling their more-than-stoniness as he probed the secret of the emotion which held him with a gentle but all-compelling power. And the stone seemed to live and breathe then, its

great chest appearing to heave as though, stirred by their approach, it had decided to sigh in silent recognition of who and what they were and had chosen to reveal its secret life for all who cared to see and share and remember its vision. (280–281)

『ジュンティーンズ』の作品世界にリンカーンは、裏切りの歴史に耐え、立ち上がる日を待ちながら沈思する人となって現前する。エリスンはリンカーンを、時を超えた息吹と共に描き出し、ワシントン・モニュメントの彼方を睥睨する石の精神として蘇らせたのである。

活字で知るのみの雄弁が、今にもリンカーン像から鳴り響くかに感じたヒックマンが、翌日議会で傍聴するサンレイダー上院議員の演説は、歴史の退嬰を象徴するかのようである。議会きっての人種差別主義者として知られるサンレイダーによる民主主義概念の乱用は、憲法の名の下に白人優越主義を唱える南部的言説のカリカチュアとも言える。たとえば彼は言う。「国家の難題に立ち向かうに際し、我々に備わる抑制と均衡の原理、国家の精巧なる代謝を司る憲法規定の目的を忘れてはならない。我々が抑制を抑制し、均衡を均衡するに当たっては、泰然として抑制を均衡し、均衡を抑制し、各々を然るべき秩序の下におくのだ」(20–21)。三権分立をめぐる詭弁を弄するサンレイダーに、エリスンは「南部宣言」の憲法議論を風刺したと解せよう。

「南部宣言」は、「憲法上の諸原則に関する宣言 (Declaration of Constitutional Principles)」なる正式名称のもと、「ブラウン判決」の最高裁命令を拒絶すべく冒頭からこう述べる。「建国の父が抑制と均衡を旨とする憲法を我々に与えたのは、いかなる個人や集団にも、無制限の権力を安全に委ね得ないことを、歴史の教訓から認識していたからにほかならない」。州権主義的憲法論を主張する同宣言は、ブラウン判決を司法権の乱

用と決めつけ、立法府と州権とに対する侵害行為として糾弾する。その根拠づけに利用されたのが憲法修正第十条、つまり、「憲法によって合衆国に委任されておらず、また州に対して禁じられていない権限は、各々、州またはその人民に留保される」という条文だった。憲法には教育へのいかなる言及もなく、市民権の保証を定めた修正第十四条とて州の教育制度に波及する意図は有さぬはずだから、最高裁判決は違憲だという論法である。

エリスンは、国家のエデン的始原と不可分の「民主主義」という言葉を、アメリカが必須の滋養としながら、それを「食べ物」にして消化不良に陥ったことを批判する。<sup>(4)</sup> その意味で、サンレイダーが「アダム」と自ら名乗るのは暗示的である。サンレイダーは、議場に沸き起こる喝采に逸脱を強めて言う。「アメリカの技術の粋たる高級車が、ハーレムに普及して価値を損ねている現実に鑑み、この際キャディラックを『クーン・ケイジ・エイト』と改称する立法を制定してはいかがか」。国家の誇る高性能八気筒エンジンは、今や「八人乗りアライグマ護送車」に成り下がったというわけである。先のエッセイでエリスンの描き出した悪夢を想起すれば、ここでサンレイダーがキャディラックに与える「クーン」の呼称は、リンカーンに対する侮蔑を意味することになる。

エリスンはリンカーンを、時代的限界の中にあつたことも踏まえて肯定する。南北分裂に向かう国家的危機の解決手段として、リンカーンが奴隷解放と同じ比重で黒人のアフリカ植民を考えていた事実を、エリスンは評論“*What America Would Be Like Without Blacks*”に指摘する（CE 579）。逡巡の末に奴隷解放を行ったリンカーンは、政治的・修辭的・道徳的な諸力を操る矛盾に満ちた存在だった。しかしエリスンは、リンカーンの究極的行為が、奴隷の子孫たる自分の現在を可能にしたからこそ、大統領を擁護する。偉大な大統領とは、歴史・階級・人種・宗教がせめぎ合う民主主義の本質的葛藤を、最大限の強度と創造力を以て焦点化する人物であり、

混沌を露わにしながらか秩序を創造する者だとエリスンは論じた。<sup>(5)</sup>

その思いは、リンカーン像に向き合うヒックマンの言葉に集約されよう。— “You are and you’re one of the few who ever earned the right to be called ‘Father.’ George didn’t do it, though he had the chance, but you did. So yes, it’s all right with me; yes.” (281) — リンカーンの矛盾も含めたすべてをヒックマンは肯定する。それは、独立宣言に約束された平等を、独立宣言を超えて黒人のために初めて実現し、建国の父たちのし損じた事を実行した事実にかけて、父の名に相応しい稀有の人だからである。ヒックマンがリンカーン像に向かって幾重にもくり返す「然り」は、『見えない人間』の語り手に取り憑く祖父のイメージを彷彿させる。解放奴隷の祖父は、執拗な「イエス／然り」を白人支配階級に浴びせ続けることによる徹底抗戦を、子孫への遺言とした。

幼年時代のヒックマンもまた、解放奴隷の祖父から次のような言葉を聞く — “Ole Abe Lincoln digging in the sand, / Swore he was nothing but a natural man. / Ole Abe Lincoln chopping on a tree / Swore a mighty oath he’d let the slaves go free. / And he did!” (283) — 読み書きのできない祖父が、小唄のように語り聞かせたリンカーンのイメージは、「オールド・エイブ」という名のフォークロアのヒーローとして形象化され、幼いヒックマンの心に「仲間 (one of us)」となって棲みついたのである。黒人フォークロアの根底に潜むのは、既存の社会秩序やヒエラルキーを転覆させる力である。評論集 *Shadow and Act* の序文に記す通り、エリスンはフォーク・ヒーローに、人種や宗教を超えた「ある望ましき本質、即ち身体的・美的・倫理的な力の体现者」をみた (SA xvi)。インプロヴァイズしながら語り継がれるフォークロアは、コスモポリタンな「人間の理想像」を形作るのである。

月明かりの中でリンカーン・メモリアルの階段を上る老牧師ヒックマンは、その瞬間の感銘を、「なじみのブルースをインプロヴァイズする時の

ような」解放感と表現する。

Then he was mounting the steps and feeling a sudden release from the frame of time, feeling the old familiar restricting part of himself falling away as when, long ago, he'd found himself improvising upon some old traditional riffs of the blues. . . . (279)

かくてエリソンはリンカーン・メモリアルを、アメリカの政治理念とジャズ・ブルース的創造力とが邂逅する時空として象徴化する。一瞬ごとに現在を乗り越えるジャズの創造性は、エリソンの思考において、民主主義の理想と分かち難く結びつく。常にトロンボーンを携えて説教に臨むヒックマンは、最後には言葉を楽器に託して「説き伏せ、問いただし、寿ぎつつ、語りえぬ叫びへと回帰する」(116-117)。彼は、古の歌に新たな命を吹き込む即興芸術によって、不断の自己超越としての民主主義精神を体现する、ジャズ・ブルース的ペルソナと言えよう。

## 2. 蘇生する「時の鼓動」

作品タイトルともなったジュンティーンズの祝祭は、リンカーンの奴隷解放宣言が施行された1865年1月1日から遅れること半年余りの6月19日に、連邦軍テキサス管轄区のGordon Grangerがテキサス州Galvestonに上陸し、奴隷解放を宣したことに由来する。グレインジャーは、以下に始まる大統領の一般命令を読み上げた。「合衆国大統領の宣言に従い、テキサス人民に全奴隷の自由解放を布告する。これは主人と奴隷との財産権の絶対的平等を意味するものであり、これまで両者間に存在した関係は爾今、雇用者と自由労働者との関係になる」(Wiggins, Jr. 238-239)。この直後にテキサスの解放奴隷たちが、自由を祝う宗教的な野外集会和

して始めたジュンティーンズは、やがてアメリカ南西部諸州に祝祭行事として広まってゆく。<sup>(6)</sup> その歴史的経緯は William H. Wiggins, Jr. の論考に詳しい。エリスンは、奴隷解放一世紀を画する 1965 年に、執筆中の小説からヒックマンの説教部分を、“Juneteenth” と題して *The Quarterly Review of Literature* に発表し、南部のアフリカ系アメリカ人が営み続けた祝祭の意味を世に知らしめた。

ヒックマンは、アラバマのジュンティーンズ初日に 5 千人の聴衆を前に行う説教で、暗黒の歴史から蘇る新世代の幼子として、ブリスを会衆に指し示す。父なるヒックマンのバリトンに少年牧師ブリスのピッコロのような声が唱和する、コール・アンド・レスポンス形式の礼拝は、解放奴隷の祖父からフォークロアとしてヒックマンが受け取った「エイブ・リンカーン」の精神を、世代を超えて語り継ぐ営為でもある。

この祈りの場で白人に拉致されかけたことから、ブリスが逸脱の人生を踏み出すのは象徴的である。後に人種差別主義者のサンレイダー上院議員となったブリスが、ジュンティーンズを忘却の彼方から思い出すのは、死の床でヒックマンと再会する時である。「今もあれをジュンティーンズと呼んで祝うのか」というサンレイダーの問いは、一世紀に亘りリンカーンの遺産を忘却に付した国家の歴史を映し出す。「たとえ世の中が抹殺しようとも、決して忘れない」ヒックマンとの認識の乖離が、そこに浮き彫りとなる。二人は、ジュンティーンズの祈りを語り直すことによって、埋め難い溝を修復するかのように記憶を手繰り寄せてゆく。死線をさ迷うサンレイダーは、かつて幼い自分が「黒い、黒い、真の父」たるヒックマンと呼び交わした、ジュンティーンズの原風景へと回帰するのである。

作品の要をなすジュンティーンズの説教は、ヒックマンとサンレイダーとが共に記憶を蘇らせる再創造行為として、読者に開示される。H. William Rice の指摘するとおり、二人が織りなす記憶の交感は、「宣言さ

れた事の再宣言」としての意味を帯びる (Rice 126)。時の風化を超えて  
ジュンティーンズを脳裡に再現するその語りは、南部再建の挫折とともに  
に途絶したリンカーンの記憶を紡ぎ直し、人種的混迷を深める同時代に蘇  
らせる営みでもある。エリスンは、人種を横断するこの「語り直し」の共  
同作業に、民主主義再生への願いを託した。

ヒックマンとブリス／サンレイダーは、死と再生の叙事詩を交唱的に紡  
ぎ出してゆく。感謝祭に語り継がれるメイフラワー号と、中間航路に浮か  
ぶ「棺」にほかならぬ奴隷船とが、いずれもキリスト教徒の船であった事  
実から説き起こすその説教は、民族離散体験を、<sup>ディアスポラ</sup>ピルグリム・ファーザー  
ズに象徴される米国史の「正典」に対峙させる。ヒックマンは、民族受難  
史を呪術的に呼び起こし、強靱な奴隷たちが生きて「新大陸」に渡りおお  
せたことを、まず神に感謝する (120-121)。その祈りはジュンティーン  
ズを、アメリカが祝うべき真の「感謝祭」として位置づけるのである。

「食べるという観点から考えるだけでも、それは真に偉大な行事だった」  
とヒックマンは回想し、ジュンティーンズの感謝祭たる所以を語る。大  
群衆に供された 1500 斤のサンドウィッチ、500 ポンドのナマズとフエダ  
イ、900 ポンドのあばら肉バーベキュー、85 個のヴァージニア直送ハムを  
始めとする幾多の食物を、彼は列挙する。南部各地から集い来る者たちの  
空腹を、豊饒な土地の恵みが満たすのだ。William H. Wiggins, Jr. によれば、  
心ゆくまで食することは、ジュンティーンズの儀式的ならわしの一つで  
ある。奴隷制度から解放されたジュンティーンズの祝賀者たちは、溢れ  
るような食物に彩られたピクニックやダンスに、自由な人間としての新し  
い社会的地位を象徴化した (Wiggins, Jr. 239-240)。ヒックマンの述べる  
とおり、ジュンティーンズの食物が人々を満たすことは、魂の充足を顕  
示する象徴行為なのである (133)。ここに「真の感謝祭」たるジュンティーン  
ズは、民主主義概念を支配文化の専有物として再三「食べ物」にしてき

た歴史に対する祝祭的な批判となる。

ヒックマンの説教は、大地に対する所有権の主張によって、アメリカ黒人の受難史を脱周縁化する。「我々はこの大地に生を受け、血を流し、涙で潤し、屍で肥やしてきたがゆえに、大地は我々のもの」なのである。母なるアフリカの大地と断絶し、強制移送された奴隷を、ヒックマンは喪失された身体として描き出す。「目も、耳も、舌も、太鼓も、踊りも、歌も、ラッパも、音も」、一切を失った奴隷たちは、「為すことも為さざることも、生きることも死ぬことも、その選択権のすべてを奪われて」新大陸に離散した。喪失された身体の一象徴である「アフリカの太鼓」を、ヒックマンのビートを刻む語りは、次のように焦点化する。

Drums that talked like a telegraph. Drums that could reach across the country like a church-bell sound. Drums that told the news almost before it happened! Drums that spoke with big voices like big men! Drums like a conscience and a deep heartbeat that knew right from wrong. Drums that told glad tidings! Drums that sent the news of trouble speeding home! Drums that told us our time and told us where we were . . . (122 – 123)

ヒックマンはここで、自分たちの祖先に「時と居場所」を告げ知らせていたアフリカの太鼓を、人間生活の心臓機能として描き、日々鳴り響くその音を魂の鼓動に重ねる。太鼓や歌や踊りを奪われることは、生命の深部に脈打つ「時の鼓動」を喪失することにはかならない。ヒックマンの祈りは、中間航路の奴隷船によって切断された暗黒の時間から、母なる大地に根ざす有機的な時の鼓動を取り戻そうとする意志の表明である。

アフリカの身体に対する西洋の介入が招来した決定的な時間の断絶

を、Richard Wright は、「歴史的時間変位の裂開 (a gaping historic “time” displacement)」と呼ぶ(Wright 10)。Paul Gilroy の指摘するとおり、W. E. B. DuBois、Frederick Douglass、Wright たちの「近代性」に対する考え方は、奴隷経済の大動脈をなす中間航路のカタストロフィックな裂け目を基盤としていた。これらの作家が共有するのは、西洋中心主義的な歴史観に区分される時間意識とは異質の、ディアスポラの時間である。西洋の介入という決定的地点から流れ出すその時間意識は、「起源としてのアフリカの時間を圧縮」し、近代性との間に絶えざる緊張関係を築く。彼らの表現様式が内包する、「ある異なった生と存在のリズム」を、ギルロイは「シンコペートされた時間性」の導入と呼んだ (Gilroy 196-202)。

エリスンの『見えない人間』にも、このシンコペートする時間性が重低音となって還流する。孤独な地下空間で蓄音器に飽かず耳傾ける語り手は、Louis Armstrong の音楽が喚起するジャズの時間感覚を、次のように描写する。

Invisibility, let me explain, gives one a slightly different sense of time, you're never quite on the beat. Sometimes you're ahead and sometimes behind. Instead of the swift and imperceptible flowing of time, you are aware of its nodes, those points where time stands still or from which it leaps ahead. And you slip into the breaks and look around. That's what you hear vaguely in Louis' music. (*IM* 8)

アームストロングの音楽が巧まずして繰り出すのは、時間の進行を天衣無縫に攪乱する瞬間的な「ずれ」、あるいは時間的離接の感覚である。そこにエリスンは、「見えない存在」の音楽 (music of invisibility) に拍動する詩的な力をみた。

「神のトロンボーン」なるヒックマンの異名が表象するのも、同じ時間感覚である。Christopher Z. Hobson の指摘するとおり、この異名は明らかに、James Weldon Johnson の著書、*God's Trombones* (1927) に寄せるエリスンのオマージュと考えられる (Hobson 641)。ジョンソンはこの書で、アフリカ系アメリカ人の重要な口承伝統をなす牧師の説教を、7編の詩的形式に再現した。ジョンソンは序文で、黒人牧師の音楽的な声が横溢させる表現力をトロンボーンに例える。トロンボーンはいかなる楽器にも増して、人間の声の感情的振幅を、圧倒的声量で表現する力を有するからである。黒人牧師の朗々たる声は、リズムミックな言葉の推進力と相俟って最大の効果を生む。韻律を自在に操り、沈黙の瞬間によってビートを刻むその独特のテンポを、ジョンソンは「揺るぎない語りのシンコペーション」と表現する。

There is a decided syncopation of speech — the crowding in of many syllables or the lengthening out of a few to fill one metrical foot, the sensing of which must be left to the reader's ear. The rhythmical stress of this syncopation is partly obtained by a marked silent fraction of a beat; frequently this silent fraction is filled in by a hand clap. (Johnson 8)

ジョンソンの編んだ説教集がポエティックに浮かび上がらせるのは、まさにギルロイが「中間航路のカタストロフィー的な裂け目」と呼ぶ深淵に生起する、生の拍動と言うべき韻律である。

エリスンは、アフリカの時間を剝奪した西洋の暴力性を、『ジュンティーンズ』の挿話に描き込む。ヒックマンのもとを離れ、映画人として富の追求に邁進するブリスは、ある日、ロケ地で西部の荒くれ男に遭遇する。アフリカ系の同行者に銃口を突きつけて威嚇するこの男は、別れ際に

時間を問われると言いつつ。「時間だと？余計なお世話だ。この町じゃ俺たち流の時間でやってるんだ」(80)。ここに示されるのは、西洋中心主義的近代の縮図をなす、アメリカ西部の膨張主義的時間であろう。

領土覇権と物質文明とに駆り立てられるこの殺伐たる時間と対照をなすのは、西へ向かうブリスがオクラホマ辺境の草原で出会う褐色の肌の女性である。アフリカ系とチェロキー族の血をひく彼女は、「木陰の角度で」時を言い当てる。大陸を西進し続けた物質文明の狂奔的時間とは異質の、自然の巡りと一体化した姿がここにある。「木深い丘をさまよひ、眩い海原を帆走し、星を散りばめた夜の静寂に歌う、夢みるような深い心」を、ブリスはこの混血女性に感じ取る。しかし、物質文明に取り憑かれた彼は「移動することが全て」であり、「西へ動き続けねばならない」(84-93)。時計は東部に質に入れてきたと言うブリスは、この女性のように自然の巡りを読み取る力もなく、物質主義的野心と引き換えに、大地に根ざす時の息吹を見失ってしまったことになる。

ジュンティーンズの説教が「失われた太鼓」として形象化するのは、大西洋から「新大陸」の大西部へ猛進した西洋近代の時間性に対峙する、異なった「時の鼓動」である。ヒックマンはこの野外礼拝を、マイノリティの土地として歴史を重ねたアラバマの森で取り行う。古来、チョクトー族のものだった土地が沼地化し、代わって住みついた奴隷たちが死者を埋葬してきた土地である。太鼓に象徴される「自分たちの時間 (our kind of time)」を回復しようとする者たちの死と再生の物語が、この聖霊の地で呪術的に紡がれるのである。アフリカの時間を切断されて「新世界」に離散し、地中の屍同然となった民が息を吹き返すその生命力を、ヒックマンは大地の鼓動として描き出す。失われた身体に残る神経線維の片鱗が、暗黒の地中に再び拍動し始める神秘に、彼は神の顕現をみるのである。奴隷たちが闇の中に命の胎動を聞きつけるさまを、ヒックマンは次のように心

象化する。

We heard it down among the roots and among the rocks. We heard it in the sand and in the clay. We heard it in the falling rain and in the rising sun. On the high ground and in the gullies. We heard it lying moldering and corrupted in the earth. We heard it sounding like a bugle call to wake up the dead. Crying, Doooooo! Ay, do these dry bones live! (126)

歴史的不在性の中に葬り去られた者たちが地中に聞く神の声とは、自分という大地の声であることを、ヒックマンはここに示す。「汝自身であるところの大地を信じよ」と唱えるその説教は、母なる大地から引き裂かれ、「新大陸」に離散した民が、森羅万象との一体化に自らの「時間」を回復してゆく祈りにほかならない。そこに喚起されるのは、自らの自然に内在する神性を信ずる、飽くなき肯定の精神である。自分自身のリズムを刻んで一日を生きる時、「大地の全てが微笑み、我々の時に合わせて動き出す」という表現でヒックマンは、失われた時間がアメリカの大地に再び鼓動し始める奇跡を寿ぐのである (131)。

河を下って深南部へ離散を重ね、綿花畑のくびきに繋がれた奴隷が、大地との交感から取り戻す「内なる鼓動 (the inner beat)」に、ジャズの原動力は発する。

There's many a thousand gone down the river. Mamma sold from papa and chillun sold from both. Beaten and abused and without shoes. But we had the Word, now, Rev. Bliss, along with the rhythm. They couldn't divide us now. Because anywhere they dragged us we throbbed in time

together. If we got a chance to sing, we sang the same song. If we got a chance to dance, we beat back hard times and tribulations with the clap of our hands and the beat of our feet, and it was the same dance. (130)

かくて舞踏する身体となって蘇る生命力を、彼らの歌やドラムや金管は祝福する。ジュンティーンズの祝祭を彩るミュージシャンをヒックマンが、「地上の万物を一斉に歌い出させることのできる」者たちと表現する所以である。

『ジュンティーンズ』の作品世界が宗教性を色濃く湛えながら、宗教的枠組みを超えた読みを求めることは、Horace A. Porter も指摘するとおりである (Porter 107)。「新しい種類の人間となること」、あるいはやがて生まれる「そうした人間たちの一部となり要素となること」に、ヒックマンは人間としての神性を見出した。「時は必ずスウィングし、スパイラルしながら回帰する」と説くヒックマンの言葉は、ニーチェ的な閃きをも帯びる。彼が大地の鼓動に重ねる「シンコバートする時間性」は、極めて実存的な生の肯定であり、歴史の地下層から回帰するこの「時の鼓動」こそ、エリスンが第一長編で「見えない存在の音楽」(IM 14)と呼んだジャズの真髄でもある。

### 3. 実存としての神性

Robert J. Butler の指摘するとおり、ヒックマンはその自己認識の強度ゆえに、エリスンの造形した瞠目すべき人物の一人であるのみならず、「真のパブリック・ヒーロー」として類い稀な文学的位置を占めると言えよう (Butler 221)。自己実現に向かうその意志力は、サンレイダーの出生の秘密が明かされる作品終盤に凝縮する。サンレイダーを身ごもったアラバマの白人女性は、ヒックマンの弟を死に追いやった挙げ句に身重の姿を突然

現わし、「あなたの弟を返しに来た」と告げる。ヒックマンにすればそれは、「私の黒人としての男性性を利用して、私の人間性を全否定する」所業である。

この場面が作品全体を収斂させる求心力をもつのは、アメリカ南部の人種とジェンダーと政治権力とが、極限的切迫感をもって背後に連動するからである。評論“An Extravagance of Laughter”（1985）においてエリスンは、タスキーギの学生時代にアラバマで実感した人種社会構造を論じる。20世紀半ばに向かう時代にあつてなお、「白さ」は、<sup>マニフェスト・デスティニー</sup>明白な天命を任じて深南部に遍在し、アフリカ系アメリカ人を、征服すべき「領土／テリトリー」と位置づけていた。ヘイズ＝ティルデンの妥協以後、奴隷制時代の過去を神話化することにより民主改革を空洞化させる南部の企ては、白装束に松明を携えて黒人を生け贄にする儀式装置によって強化された。

その中心要素となった白人女性の「女性性」は、「白さの神話によって女神の座へと神格化された一種のカルト的表象」として、アフリカ系アメリカ人のマスキュリニティーに対する無差別テロリズムを発動させる威力をもった。この暴力システムを是認することで、南部の支配階級は、下層の白人をも対等者として心理的に取り込み、階級を超えた忠誠心を確保できた。南部の政治家は、こうして作り出した人種的対立構造を、連邦議会への進出と勢力拡大につなげ、南北戦争での敗北に対する逆襲を試みたのである（CE 626-641）。かかる構図に照らせば、ヒックマンの弟の死に象徴される人種テロリズムを土台に、「南部宣言」は出現したことになる。

ヒックマンは、「土<sup>ファウンデーション</sup>台を忘れ去って摩天楼を駆け上がる」政界の成り上がり者たちに、自分の頭部が負った古傷を対置させる。それは、かつて斧とピストルを握りしめて投票所に向かい、権利のために戦った時の向こう傷である。アメリカの土壌を少し掘り返せば、葬り去られた沈殿物を「全大地が噴き上げる」はずであり、「どれほど多くのものがこの不安定極まり

ない土台の上に築かれてきたか」を、ヒックマンは問うのだ (319; 275)。

トロンボーン吹きヒックマンは、身重の女と対峙する自分を、「吹くか踊るか、踊るか吹くか」せざるを得なくなった「血を流す切り株」に例える (301)。しかし彼は、弟の命を奪った赤ん坊と向き合う屈辱と憎悪に押し潰されながら、その暗い情念を生への意志に変換する。善悪や正義を超えてただ眼前の命に意識を向ける彼は、過去を現在で打ち消し、「今、ここ」へと自己を差し向ける — “But look, Hickman — Alonzo . . . this is here and now . . .” / “A start is a start, and ‘is’ is ‘is’ not ‘was.’” (275) 南部的罪業の落とし子であるブリスは、人種主義社会の悲惨を一身に背負って生まれる一個の象徴でもある。「古い邪悪の全てが詰まったこの病巣の果実」を世に送り出す役割を、ヒックマンが本能的に担うこの瞬間に、無限の自己超越によって蘇生するジャズ精神が、血肉化すると言えよう。

殺意と死の情動に引き裂かれるヒックマンが、『見えない人間』の重要なフォーク・ペルソナである Peter Wheatstraw を、脳裡に呼び起こすことは意味深い。ヒックマンは自分のおかれた異常事態を、かつて賭博場で銃弾を浴びた刹那の息詰まる記憶に重ねる。彼は咄嗟にトロンボーンを投げつけてこれを迎え撃ち、間一髪で命を取りとめたのであり、楽器はまさに盾となった。「トロンボーン吹きのギャンブラー」として鳴らすヒックマンが、以来、賭博場に乗り込むたびに決まって唱えた科白が以下である。 — “Fee fi fo fum / Who wants to shoot the devil one? / My name is Peter Wheatstraw, / I’m the devil’s son-in-law, / Lord, God Stingerroy!” (294) — 手負いのヒックマンは、「悪魔の義理の息子」ピーター・ホイートストローを自らに憑依させ、悪魔払いをしたのだ。

エリスンがこのフォーク・ペルソナのモデルとしたのが、Petie Wheatstraw の名で知られるセント・ルイスのブルース・シンガー、William Bunch である。第一次世界大戦以降の北部大移住によって都市労

働者となったアフリカ系アメリカ人の格闘を歌うそのブルースは、小編成ジャズバンドでスウィングしつつ、南部土着の伝統に根ざしていた。ピーティーは、生まれ育ったテネシーやアーカンソーを始め、南部諸州を流浪して親しんだフォークロアのコンテクストに、強烈な自己イメージを形成した。

Steven C. Tracyによれば、「ピーティー・ホートストロー」の名は、アフリカ系アメリカ人の魔術的民間伝承に由来する。「ピーティー」は、癒しの炎を操る“Petro”と呼ばれるザイールKi-Kongoの部族神を、「ホートストロー」は、麦の穂に伴侶を占う力が宿るとする南部の民間伝承を、それぞれ暗示する。さらにピーティーが自ら冠した「悪魔の義理の息子」という称号の背景には、悪魔の娘を誘惑して共に悪魔を打ち負かすフォークロア・モチーフがある (Tracy 105-106)。悪魔は転覆さるべき権力の象徴であり、義理の息子という位置取りから、「悪魔との関係性を受容し超越する」強力なフォークロア的アウトロー像が立ち現れる。つまりピーティー・ホートストローの音楽様式と名前のシンボリズムは、文化接合的な世界観の体现でもある。

これを原型とする『見えない人間』の登場人物「ピーター・ホートストロー」を、ヒックマンが咄嗟に呼び出すことは、極めて象徴的な意味を帯びる。人種テロリズム社会の落とし子という「病巣の果实」に、ヒックマンが暗い情念の全てを乗り越えて向き合う事実は、ピーター・ホートストローというフォーク・ペルソナの物語的コンテクストが内包する、受容と超越に重なり合うからである。ヒックマンは、社会悪の象徴と言うべき赤ん坊の「産婆」となり、その命を「プリス (至福)」と名づける。父親も人種も知れぬ白い赤子の父となり、人種の境界を横断する希望を育てるその決意は、中絶し続けるアメリカ民主主義に新たな命を送り込もうとする願いの実践でもある。「お前のソロが立ち上がるまで、じっと休止符

を数えよ」と我が身に唱えるヒックマンは、暗黒から立ち上る自分自身のリズムを、行動に乗り移らせる。エリスンは、アメリカの地下層で書く行為を通して自らの「洞窟」に光を充填した『見えない人間』の想念を、ヒックマンという一個の人間像に具現化したと言えよう。

ヒックマンの獲得する超越的な自由は、「ピトロ」神の浄化の炎を通じてリンカーンへと接続している。先述のエッセイ“Tell It Like It Is, Baby”において、リンカーンをめぐる悪夢から醒めたエリスンが、「悪魔払い」のために脳裡に蘇らせるのが、ゲティスバーグの演説である。Garry Wills が述べるとおり、リンカーンの言葉は、ゲティスバーグの戦いに毒された空気を浄化する力に満ちていた。和解と再生を説くその言葉によって、戦闘の傷跡は昇華され、殺戮の激闘は理知的なものに変容し、抽象的な真理が正当化された。生々しい戦火の跡は、政府が平等の「理念」を維持できるかをみる試金石となったのである（Wills 37）。奴隷解放によってリンカーンが、建国の父を超え全人民の父となったように、ヒックマンもまた、人種や血族を乗り越えて父となる道を選び取る。

ヒックマンが要請するのは、「この国の狂ったダンスに命令する（calling the tune）ことのできる者」になる意志である（285）。Thomas S. Engeman の指摘するとおり、ヒックマンの究極の力は、「立法者」としての力にある（Engeman 101）。奴隷解放後一世紀に亘る忘却の歴史を知り抜くヒックマンは、「この国をもう一度血の海にして浄化しようとする復讐が起きてても何ら不思議はない」と考える（285）。しかし、かつて夥しい命を賭して成し遂げられたものがあつた厳然たる事実にかけて、彼は人間信頼を失わない。自分を裏切って逸脱するプリストとの絆を執念深く追い続け、決して断念しないのはそのためである。

銃撃されたサンレイダーの最後の想念描写において、エリスンの問題意識はブラック・パワーへと射程を伸ばす。白人優越主義と、反動としての

黒人ナショナリズムとを描くアイロニーの背景には、60年代の時代変容を見つめる作家の危機感がある。公民権運動の結果、1964年には公民権法と憲法修正第二十四条、65年には投票権法が成立し、一世紀前の南部民主化政策をしのぐ「第二の南部再建」というべき成果がジョンソン政権下にもたらされた。しかし、公民権運動はその絶頂期に至って、内部分裂や人種暴動によって求心力を失う。66年には、Malcolm Xの影響を受けたSNCC（学生非暴力調整委員会）議長のStokely Carmichaelが、「必要とあらば手段を選ばず」を標榜するブラック・パワー・ドクトリンを宣言した。キングの非暴力主義や人種統合主義を拒否し、戦闘的アジテーションに訴えるその主張は急速に拡大し、同年ブラック・パンサー党が結成された。

65年から68年にかけての「長く暑い夏」に発生した大規模人種暴動は、150件にのぼる。連邦軍の戦車が出動した67年のデトロイト大暴動の最中にジョンソン大統領は、イリノイ州知事Otto Kerner, Jr.を議長とする「国内騒乱に関する全米諮問委員会」（National Advisory Commission on Civil Disorders）の設置に至る。同委員会は翌68年に提出した報告書で、「この国は黒人社会と白人社会という、分離された不平等な二つの社会に向かって進んでいる」との結論を下した。

怒れる群衆が黒人革命に駆り立てられてゆく中、エリソンは、黒人ナショナリストから浴びせられる侮辱的言動に苦しみながら、平和主義的信条を貫いた。危機的人種状況に対してエリソンが公的発言を始めるのは、この年である。68年の講演でエリソンは、「北米大陸に二つの分離した国家が存在しえなかったとするなら、二つの分離した人種が存在しえないのも明白だ」と述べて、分離と憎悪を煽る社会動向を批判した（Rampersad 446-449）。この発言は、リンカーンが1858年にイリノイの共和党州大会で行った「分かれたる家は立つこと能わず」の演説（“A House Divided”

Speech) を彷彿させる。リンカーンはこの中で、国が半ば奴隷、半ば自由の状態で存続することはありえず、奴隷制度の反対者がその拡張を阻止して根絶に向かわせるか、支持者がこれを全州に合法化するかのおのづからと迫った。エリスンは、南北戦争の国家分裂を暗示しながら、白人優越主義と黒人ナショナリズムの双方に向けて警鐘を鳴らした。

銃撃されたサンレイダーが生死の境で想起するのは、3人のアフリカ系アメリカ人を乗せて轟音とともに突進して来る奇怪な改造車である。「こんなアライグマ護送車でどうだ」と絶叫する彼らは、「キャディラックでも、リンカーンでも、ピューウィックでもない、得体の知れぬ部品の塊」を作り出し、目の前に立ちはだかる全てを薙ぎ倒すために出現したのだ。「否定の権化」になり果てたサンレイダーは、復讐に燃える彼らが路上に放つこの「移動式時限爆弾」によって、自分が地獄の道連れにされようとしているのを悟る。車体から突き出す2機のアンテナに翻るのは、「波打つ巨大なアライグマの尾と、南部連合旗」である(347)。白人至上主義者と黒人ナショナリストが、激しく反目しつつ同類項と化し、互いの分離に向かって歴史を逆走する不毛がここに浮かび上がる。悪夢の雲間から「自分に呼びかけているヒックマンの懐かしい声」を聞くサンレイダーの意識に、エリスンは人間愛への信を託す。

Arnold Rampersad も指摘するとおり、ジュンティーンズの説教場面ほど、エリスンが自身の統合主義的思想の中に、人種的プライドを横溢させたことはかつてない(Rampersad 422)。『ジュンティーンズ』の根本メッセージは、公民権運動の曙を起点に、人種騒乱と黒人ナショナリズムの台頭に至る歴史的激動の中で形成された。エリスンが示す人種の矜持は、アフリカ系アメリカ人の急進的戦闘性を取り込みつつ、その激情を統合主義的理想に変容させようとする強い意志表明でもある。

「アメリカ人は、森を浪費するように経験を浪費してきた」というエリスンの言葉は、資源の豊かさゆえに問題を永久に先送りできると考えてきた国家的傾向への批判である。<sup>(7)</sup> アフリカ系アメリカ人は、合衆国誕生の遙か以前から存在し続けてきた生き証人であるがゆえに、自らとアメリカのアイデンティティーを語る責務と力をもつ、とエリスンは Robert Penn Warren との対談に語る (Warren 347)。歴史の風化を耐え抜くアメリカの政治理念と、中間航路の奴隷船に生成する「見えない存在の音楽」とを連結することで、エリスンは実存的な創造への祈りを、ヒックマンという一人の人間性に聖化したのである。

\* 本稿は、日本アメリカ文学会第 48 回全国大会 (2009 年 10 月 10 日 於秋田大学) における口頭発表内容に加筆したものである。

## 註

- (1) エリスンが発表した第二長編からの抜粋は以下のとおり。  
“And Hickman Arrives.” *The Noble Savage* (1960); “The Roof, the Steeple and the People.” *Quarterly Review of Literature* (1960); “It Always Breaks Out.” *Partisan Review* (1963); “Juneteenth.” *Quarterly Review of Literature* (1965); “Night Talk.” *Quarterly Review of Literature* (1969); “A Song of Innocence.” *Iowa Review* (1970); “Cadillac Flambé.” *American Review* (1973); “Backwacking, A Plea to the Senator.” *Massachusetts Review* (1977).
- (2) Ralph Ellison and James Alan McPherson, “Indivisible Man,” *The Collected Essays of Ralph Ellison*, 387.
- (3) 署名者の内訳は、上院議員 19 名と下院議員 82 名で、そのうち民主党員が 99 名、共和党員が 2 名。議員の選出州は、アラバマ、アーカンソー、フロリダ、ジョージア、ルイジアナ、ミシシッピ、ノースカロライナ、サウスカロライナ、テネシー、テキサス、ヴァージニアの南部 11 州。Strom Thurmond が、最初の草稿執筆者。

- (4) Ellison, "The Little Man at Chehaw Station," *CE* 502–503.
- (5) Ellison, "The Myth of the Flawed White Southerner," *CE* 557–559.
- (6) テキサス白人にとり長らくこの日は、連邦軍の占領統治による屈辱的な南部再建の始まりを意味したが、同州は 1979 年に、ジュンティーンズを 14 番目の公式祝日として法制化した。
- (7) Ellison, "The Golden Age, Time Past," *CE* 239.

### 引用文献

- Butler, Robert J. "Ralph Ellison's National Narrative." *The Critical Response to Ralph Ellison*. Ed. Robert J. Butler. Westport: Greenwood Press, 2000. 217–225.
- Ellison, Ralph. *Juneteenth*. New York: Random House, 1999.
- . *Invisible Man*. 1952. (*IM*.) New York: Random House, 1995.
- . *The Collected Essays of Ralph Ellison*. (*CE*.) Ed. John F. Callahan. New York: The Modern Library, 1995.
- . *Shadow and Act*. 1964. (*SA*.) New York: Random House, 1995.
- Engeman, Thomas S. "Invisible Man and Juneteenth: Ralph Ellison's Literary Pursuit of Racial Justice." *Ralph Ellison and the Raft of Hope: A Political Companion to Invisible Man*. Ed. Lucas E. Morel. Lexington: UP of Kentucky, 2004. 91–104.
- Gilroy, Paul. *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*. Cambridge: Harvard UP, 1993.
- Grantham, Dewey W. *The South in Modern America: A Region At Odds*. New York: Harper Collins, 1994.
- Hobson, Christopher Z. "Ralph Ellison, *Juneteenth*, and African American Prophecy." *Modern Fiction Studies* 51 (2005): 617–647.
- Johnson, James Weldon. *God's Trombones: Seven Negro Sermons in Verse*. 1927. Ed. Henry Louis Gates, Jr. New York: Penguin Books, 2008.
- Murray, Albert, and John F. Callahan, eds. *Trading Twelves: The Selected Letters of Ralph Ellison and Albert Murray*. New York: Random House, 2000.

- Patterson, James T. *Grand Expectations: The United States, 1945–1974*. New York: Oxford UP, 1996.
- Porter, Horace A. *Jazz Country: Ralph Ellison in America*. Iowa City: U of Iowa P, 2001.
- Rampersad, Arnold. *Ralph Ellison: A Biography*. New York: Alfred A. Knopf, 2007.
- Rice, H. William. *Ralph Ellison and the Politics of the Novel*. Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, 2003.
- Tracy, Steven C. “A Delicate Ear, a Retentive Memory, and the Power to Weld the Fragments.” *A Historical Guide to Ralph Ellison*. Ed. Steven C. Tracy. New York: Oxford UP, 2004. 85–114.
- Warren, Robert Penn. *Who Speaks for the Negro?* New York: Random House, 1965.
- Wiggins, Jr., William H. “Juneteenth: A Red Spot Day on the Texas Calendar.” *Juneteenth Texas: Essays in African-American Folklore*. Ed. Francis E. Abernethy, Patrick B. Mullen, and Alan B. Governar. Denton : U of North Texas P, 1996. 237–252.
- Wills, Garry. *Lincoln at Gettysburg: The Words That Remade America*. New York: Simon & Schuster Paperbacks, 1992.
- Woodward, C. Vann. *The Strange Career of Jim Crow*. 1955. New York: Oxford UP, 2002.
- . *The Burden of Southern History*. 1960. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1993.
- Wright, Richard. *White Man, Listen!* 1957. New York: Harper Collins, 1995.